

朝日選書
260



ドナルド・キーン 著
金関寿夫 訳

百代の過客 下

日記にみる
日本人

ドナルド・キーン 著

金関寿夫 訳

百代の過客 下

日記にみる日本人

朝日選書 260

ドナルド・キーン (Donald Keene)

1922年ニューヨーク生まれ。コロンビア大学卒。在学中から日本語を学び、戦後ケンブリッジ大学、京都大学などで日本文学を研究。「国性爺合戦の研究」でコロンビア大学博士となる。日本文学を多数海外に紹介、1962年に菊池寛賞、1983年に山片蟠桃賞(第1回)、国際交流基金賞受賞。現在コロンビア大学教授、朝日新聞社客員編集委員。著書『日本文学史・近世篇』『日本文学史・近代現代篇』『日本文学散歩』『日本人の質問』など。『人間失格』など英訳も多数。

金関寿夫 (かなせき・ひさお)

1918年松江市生まれ。同志社大学英文科卒。都立大教授を経て、現在駒沢大学教授。専攻アメリカ文学。著書『アメリカ・インディアン』の詩』『ナヴァホの砂絵』など。訳書G・スタイン『アリス・B・トクラスの自伝』ほか。

百代の過客 日記にみる日本人(下)

朝日選書 260

1984年8月20日 第1刷発行

定価1000円

1984年9月20日 第2刷発行

著 者 ドナルド・キーン

訳 者 金 関 寿 夫

発 行 者 初 山 有 恒

印 刷 所 共同印刷株式会社

発 行 所 朝 日 新 聞 社



〒104 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

©D. Keene 1984 Printed in Japan

装幀・多田進

ISBN4-02-259360-1

目次

Ⅲ 室町時代 3

大神宮参詣記 8

都のつと 15

小島の口すさみ 18

住吉詣 24

鹿苑院殿嚴島詣記 27

なぐさめ草 30

富士紀行 38

善光寺紀行 41

藤河の記 44

廻国雜記 52

白河紀行 56

筑紫道記 64

遠江守政一紀行 139

東めぐり 142

丁未旅行記 145

野ざらし紀行 150

鹿島詣 159

笈の小文 162

更科紀行 169

奥の細道 172

嵯峨日記 184

西北紀行 188

東海紀行 193

歸家日記 199

庚子道の記 203

伊香保の道行きぶり

風流使者記 212

蝶之遊 218

長崎行役日記 226

江漢西遊日記 232

改元紀行 240

馬琴日記 246

井関隆子日記 254

浦賀日記 263

長崎日記 266

下田日記 272

終わりに 275

参考書目録 278

あとがき 284

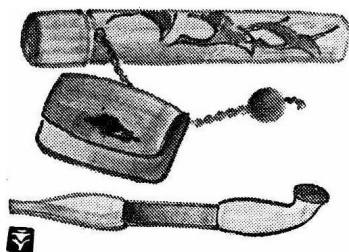
索引

装画 牧進

百代の過客
日記にみる日本人
下

朝日新聞に同名で連載。下巻には
一九八三年十一月十六日から一九
八四年四月十三日までを収録した。

Ⅲ 室町時代



失われた女性日記の伝統

『竹むきが記』以後およそ二世紀を超える期間、女性による日記は、私の知るかぎりただの一冊も残っていない。この時期に日記を記した男性といえ、漢文を用いて書いた官人、旅その他の体験を、仮名で綴った僧侶などである。漢文の日記は、室町時代の歴史学者にとってきわめて貴重な情報を含むが、その作者が、三条西実隆さんじょうじつらふのような名のある歌人の場合ですら、文学的意図を持つことはほとんどない。文学的価値をいうなら、仮名書き日記の方が、議論の余地なくすぐれている。だが残念ながら、現代の読者に訴えるところはあまりない。そのことは、戦後雨後の筍のごとく現れたさまざまな古典文学全集の、いずれにも収録されていない事実を見ても明らかである。それらの多くは、今日、文政二年（一八一九）初版の『群書類従』によってのみ読むことができる。

こうした日記を読んでさほど魅力が感じられない理由は、それらが女性的性格を失ったことと関係がある。仮名で書いた平安、鎌倉の男性日記作者は、宮廷の女房たちが打ち立てた伝統に従って書いていた。そのため彼らの日記は、時には意識的に、時には知らず知らずのうちに、作者の個性をにじみ出させている。男性日記への、この女性的影響は、和歌に対する女性的影響と、多分に通じるものがある。美への敏感な感応、そのはかなさの自覚、時の移ろいの中での喪失感——こうしたものは、作者が女性であると男性であると問わず、仮名日記、および和歌が取り扱う、まさに典型的な主題だからである。

室町の日記作者といえども、美に対して無関心であつたわけではない。また彼らは、歲月や戦乱がもたらした荒廢に、思いをめぐらすことも少なくなかつた。だが作者自身について多くを語ることは、減多になつたのである。彼らは、自己の最も深い感情は、あからさまに筆にすることなく、彼らに感銘を与えた事件の、ありのままの記述の下に隠すのを好んだ。彼らの感性は、男性的感性であり、従つてそれは、悲痛な叫びというよりは、男性らしい寡黙の中に現れたのである。

日記文学における中世的伝統の最高作は『奥の細道』であろう。あのような作品を読む時、用いられた言語の美しさ、名高い歌枕を描写する筆つきの適切さ、時の流れ、その他作者が得た靈感の、さまざまな面に関する省察などによって、私たちは圧倒される。だが芭蕉の私的な感情は、全くと言つてよいほど述べられていない。「道祖神の招き」にあうたびに、彼は常に旅に出ていった。しかし、例えばその年が西行の死没五百回忌に当たつたという事実が、果たしてその年に旅に出る決心を詩人にうながしたのかどうか、彼はなにも言っていない。また、例えば門弟の数を増やすためといったような、この旅の背後にあつたかもしれないぬぬにか私的な動機への手掛かりも、与えていないのである。また道中で逢つた人々との、なんらかの感情的な掛かり合いをほめかすところもなければ、江戸におけるいかなる家庭的な絆きずなが、出来るだけ速かに家に戻りたい気持ちに彼に起こさせたのか、それについても何等述べるところがない。芭蕉は、しばしば自分が意図するよりもっと多くをさらけ出した平安時代の女房たちとはちがひ、自分自身については、自分が見せたいと思う事のみを見せてくれるのである。

『奥の細道』は、日本文学の偉大な古典の一つである。室町時代に書かれた旅僧や官人による日記など、到底これと同じには論じられない。ところがこれらも、目指す方向は芭蕉と同じなのである。例えばばいずれも、一日一日、日を追って付けた日記のように、少なくとも見せかけている。また美的興味のあるなしにかかわらず、実際に起こった出来事を記録するという体裁をつけている。才能乏しい日記作者の手にかかる、事実への関心が、しばしば作者の想像力の羽根を折ってしまう。しかし時としてこれら室町時代の日記も、それが持つ美しさによって、というよりは、その真実性によって私たちの感動を誘うことがある。従って、女性日記の伝統が消滅した結果、日本の日記文学から多くのものが失われたことも、私たちはつい忘れがちになるのである。

大神宮参詣記

坂十仏さかじゅうぶつという僧が伊勢大神宮へ詣でる旅を描いた日記は面白い。その理由は、それが作者についてなにかを語っているからではなく、その時代における仏教と神道との関係への特殊な洞察を表しているからである。平安時代の学僧の説によると、神道の神々とは、不滅にして普遍的なるさまざまな仏教的神格の、いわば日本的顯現にほかならなかった。例えば八幡宮の神に対して、八幡大菩薩はちまんだいぼという称号が与えられた所以ゆえんである。互いに相矛盾する教義も少なくないのに、この二宗教は統合され、大方の日本人は、それを受け入れたのである。七六八年には、伊勢神宮に隣接して仏教の寺が建立され、以後多くの僧侶は、寺と神社の両方で仕えるようになった。

だが、仏教と他の宗教との統合は、別に日本に始まったわけではなかった。釈迦牟尼しやくかむに仏は、デヴァと呼ばれて広く民間に信じられていた神格の存在を認めていた。デヴァとは、釈迦自身よりはるかに非力だとしても、常人よりは格段にすぐれているとされた存在である。釈迦の説教を聴いたあと、仏教に改宗したというデヴァの話は少なくない。中国においても、仏教徒は、孔子も老子もそ

の他の哲人も、人類を助けるために、仏によってこの世に遣わされたのだ、と主張したものである。日本における本地垂迹説の創始者として、空海の名がしばしば引き合いに出される。しかし、彼が書いたとされるこの問題に関する偽作は多いが、空海の時代の日本に、本地垂迹という信仰形式が存在した事実を示すものは何物もないのである。とはいえ空海は、日本の神々にも敬意を表している。彼が高野山に寺院を建立した際、彼は山の神々の助力を頼み、仏法を害し、滅ぼすかもしれない邪神に対しては、即刻その地から立ち去るように命じたという。結局真言仏教と神道を結ぶ特別の関係が成立し、神官は、真言の呪文、印、護摩、儀式その他を取り入れるようになる。そして真言の二つの（両部）曼荼羅と、伊勢神宮の内宮と外宮は似通った様式と考えられていた。

いづれも不成功に終わった二度におよぶ蒙古の襲来は、日本人の間に強い国家主義意識を生みつけることになった。そして室町時代の初頭には、はるか往昔に成立したという触れ込みの、さまざまな偽文書が現れ、神道哲学と倫理体系を説き始める。そのうちに、日本の神々こそ原初的神格であり、釈迦も菩薩も、その単なる顕現にすぎぬという説がなされるようになる。当時神道のいわばスポークスマン、かつ吉田神社の神祇として権勢をふるっていた吉田（卜部）兼俱（一四三五～一五一一）は、神道こそ文明の根幹、中国の宗教はその枝葉、そしてインドのそれはその花実である、と書いている。

十仏が一三四一年、伊勢を訪れたのは、このような思想が発展しつつあった時期だったのである。彼の日記は、伊勢外宮の長官、渡合家行との対話の記録に、その多くの頁を割いている。十仏は、

当時指導的な神道学者であつた家行に、深い感銘を受けた模様である。それにしても、十仏と家行の場合のように、ある宗教の祭司が、全く異なる宗教の祭司と語り合い、互いに完全な意見の一致を見るとは、まことに不可思議というほかはない。だが十仏は、自分が修めた仏法だけでは、己を取り巻く世の混沌に立ち向かうことは到底不可能と感じていたのではあるまいか。そこで彼は、心を白紙にして、しかもほとんど死に物狂いで、家行の叡智に縋つたのだと思われる。

十仏は、なぜ伊勢神宮参詣を思い立ったかという、はっきりした理由は格別言っていない。たとえ仏教の僧侶であっても、神道の社中^{やしろ}最も聖なる社とされる伊勢神宮に詣でることは、少しも自然ではない、と彼が考へたのは明らかである。この日記全体の調子は、彼が立ち寄つた安濃津^{あののつ}の描写ですでに決められている。

この津は江めぐり、浦遥^{はるか}にして、ゆききの船人の月に漕^{こぐ}こゑ、旅泊の暁の枕に聞えて、あらし浪風の音忍^{しのび}がたく侍りしかば、

風寒き磯やの枕夢さめてよそなる浪にぬるゝ袖かな

文章自体が詩的であるだけではない。十仏は、昔の日記作者のひそみになつて、それぞれの体験を和歌によって集約している。しかしこの慣習は、時により、漢詩、および万葉仮名による自作の長歌を入れることによって破られている。十仏は、仏典のみならず、過去の日本の文学にも通曉していた教養人だったのである。

この日記中最も心を動かされる個所は、彼が道中で目撃した荒涼たるさまざまな風景の描写であ